

- 1 派遣期日 令和5年 11月 9日(木) ～ 11月 10日(金)
- 2 派遣先 学校名(会場名) プラザヴェルデ(1日目)、沼津市立第三中学校(2日目)
所在地 静岡県沼津市大手町1-1-4(1日目)
静岡県沼津市下香貫木ノ宮888(2日目)
<https://www.plazaverde.jp/access/>
<https://swa.numazu-szo.ed.jp/weblog/index.php?id=numazu403>

3 研修内容

- (1) 第60回東海・北陸地区中学校技術・家庭科研究大会静岡大会
研究主題 学びをつなげることを通して、実践的な態度を育てる授業
～「学びに向かう力」を育む授業づくり～

(2) 全体発表・協議・指導講評(11/9)

ア 全体発表・協議

(ア) 全日本中学校技術・家庭科研究会調査研究部

アンケート結果から、正規の家庭科教員の割合は84.6%、経験21年目の教諭が多くなっているとあった。全国的に若手の先生方が少ないことから技術・家庭科の教員を確保することが今後の課題であるとされた。また履修時期の調査では、内容項目ABCのうち、A「家族・家庭生活」の分野の履修は1年生と3年生で多く、B「衣食住の生活」では食分野1年生、衣生活分野2年生、住生活分野2年生での履修、C「消費生活・環境」に関しては2年生での履修が多くなっているとあった。今後どの学年で履修をするのか年間指導計画を立てる際の参考となった。

(イ) 静岡県発表

「題材をつらぬく“問い”」に迫るために生徒にどんなことを取り組んでいけばよいのか示すことができる具体的な課題を設定することの大切さ、また「自分ごと」として学習課題を持たせるための教師側の「しかけ」について知ることができた。実践例として技術分野において3年間を見通した題材を貫く問いの設定で「学校に野菜工場をつくろう」とし、生物育成の分野、エネルギー変換の分野、材料加工の分野、プログラミングなど1つの主題に多くの分野を関連付けて学習に望んでいた。題材計画に工夫をすることで、題材横断的な学びが実践されていた。このような題材設定の工夫がよりよい授業の実践につながるのでは是非参考にしていきたい。

(ウ) 山形県発表

振り返りの場面に重点を置き、振り返り場面を①「学習内容を振り返ったり、学習成果を確認したりする：学習内容の確認」②「学んだことや授業の気づきをどのような場面で使えるかを考えたり、本時の上手いかなかった理由を考えたり、次時の解決策を構想したりする：見方・考え方の成熟」③「自分は何ができるようになったか、学んだことによってどう変わっていくのか、学んだことをどう活かしていくのか、授業前後の変容をつかむ：自己変容の確認」の3つに設定して研究を行っていた。振り返りの場面で自分の学習を調整できる工夫や既習事項と生活や社会を結び付ける工夫がなされていた。山形県の発表から改めて振り返りの重要性に気付くことができた。

イ 指導講評

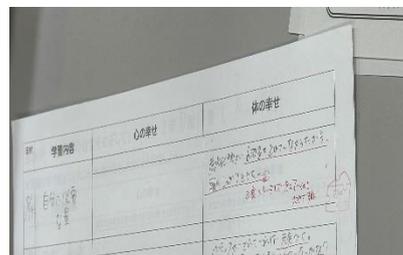
文部科学省初等中等教育局教育課程教科調査官からの指導講評では、指導要領を押さえるためのヒントとなる助言をいただいた。忙しい時間の中で指導要領の内容を読み込んでいくのは大変であるため、「ねらいとしている」「できるようにする」「指導に当たっては」「例えば」の4つの文言をキーワードとして読んでいくとよいと助言があっ

た。また生活の中から課題を設定することとあるが、目指す児童・生徒像をきちんと把握することが前提であり、子どもが生活の中から問題を見出す手立て、見出した問題を課題に設定するための手立てをつくることが教師の役割であり、この「手立て」を増やしていくことが大切であるとされた。また小中高の連携を図った題材の配列が大切になってくるということで学びをつなげられるよう各校種で見通しを持った授業を展開できるよう今後も研修を重ねていきたい。

(3)公開授業・研究協議①② (11/10)

第6分会「衣食住の生活（食生活）」授業者：沼津市立第三中学校教諭 笠原 綾子
ア 公開授業

「心も体も幸せな食生活とは」という食生活の題材を貫く問いを設定し「心の幸せ」「体の幸せ」という2つの視点をキーワードとして、食生活の学習を進めていた。話し合う際のワークシートにもその視点を設けて生徒は2つの視点から記入することができていた。また「なりたい自分になるために」まずは考えさせる（D o）から始まり、そこから授業で知識を定着させ、また「なりたい自分になるために」と再度考えさせるP D C Aサイクルの流れも踏まえた実践が行われていた。生徒の意見からも初めの「健康な自分になりたい」から「スポーツで活躍できるような健康的な自分になりたい」など記述の変化が見られ、学習の深まりを感じることができた。D oから始まる授業の良さを実際に知ることができた。



イ 研究協議①静岡県発表提案者

沼津市立大岡中学校教諭 横山 由季 助言者：静岡大学教授 村山 陽子

沼津市では、授業の中で体験的な活動を積極的に取り入れる必要があると考え、P D C Aサイクルの「D o」に着目し、題材の導入を体験「D o」から入ることで、生徒が主体的に題材とかかわり、そこから生じる問いを「自分ごと」として捉えることにより、問いを解決するための課題に向き合い続けることができると考え、「D oから始める」をキーワードに研究を進めていた。「D o」からスタートし、そこでの気づきや思いを持って学びを進めていくということですのですべての題材で行えるわけではないが、生徒の興味関心も高まることから非常に興味のある研究であった。

ウ 研究協議②富山県発表

富山県では、「生活を工夫し創造する資質・能力」が「いきてはたらく力」となるよう問題解決能力を養うことができる指導過程の在り方について更に追究し、問題解決的な学習の充実重点を置き主題に迫るための研究を進めていた。実践的・体験的な活動をただ行うだけでなく、家庭や地域との連携を図った実践を取り入れたのも工夫の1つであった。また、言語活動の充実を図るために思考ツールの活用を導入・展開・終末とどの時間でも活用できるように授業が実践されていた。特に振り返りシートにも思考ツールを活用し、学びの蓄積が目に見えてわかるようにしていたところが自分の考えを深めていくことにつながると感じた。

4 感想

東海・北陸地区中学校技術・家庭科研究大会に参加することがなかったため、先進校視察を通して自己研修の機会とさせていただいた。関東甲信越地区中学校以外の授業の様子を知ることができ非常にためになる研修となった。今回研究大会に参加して、「主体的・対話的で深い学び」を実現するために、学習課題を自分ごととして捉えることの大切さ、そして課題発見から振り返りまでの題材を貫く「問い」の有効性を知ることができた。本研修を通して学んだことを日々の授業で実践していけるように今後も研修に努めていきたい。